

一歩先を見つめて歩む力

奨励	村上 公彦〔むらかみ・きみひこ〕
奨励者紹介	日本キリスト教団寝屋川教会牧師 公益社団法人アジア協会アジア友の会設立者、専務理事兼事務局長

四十日の後、彼らは土地の偵察から帰って来た。パランの荒れ野のカデシュにいるモーセ、アロンおよびイスラエルの人々の共同体全体のもとに来ると、彼らと共同体全体に報告をし、その土地の果物を見せた。彼らはモーセに説明して言った。「わたしたちは、あなたが遣わされた地方に行って来ました。そこは乳と蜜の流れる所でした。これがその果物です。しかし、その土地の住民は強く、町という町は城壁に囲まれ、大層大きく、しかもアナク人の子孫さえ見かけました。ネゲブ地方にはアマレク人、山地にはヘト人、エブス人、アモリ人、海岸地方およびヨルダン沿岸地方にはカナン人が住んでいます。」

カレブは民を静め、モーセに向かって進言した。「断然上って行くべきです。そこを占領しましょう。必ず勝てます。」しかし、彼と一緒にいった者たちは反対し、「いや、あの民に向かって上って行くのは不可能だ。彼らは我々よりも強い」と言い、イスラエルの人々の間に、偵察して来た土地について悪い情報を流した。「我々が偵察して来た土地は、そこに住み着こうとする者を食い尽くすような土地だ。我々が見た民は皆、巨人だった。そこで我々が見たのは、ネフィリムなのだ。アナク人はネフィリムの出なのだ。我々は、自分がいなごのように小さく見えたとし、彼らの目にもそう見えたにちがいない。」

共同体全体は声をあげて叫び、民は夜通し泣き言を言った。イスラエルの人々は一斉にモーセとアロンに対して不平を言い、共同体全体で彼らに言った。「エジプトの国で死ぬか、この荒れ野で死ぬ方がよほどましだった。どうして、主は我々をこの土地に連れて来て、剣で殺そうとされるのか。妻子は奪われてしまうだろう。それくらいなら、エジプトに引き返した方がましだ。」そして、互いに言い合った。「さあ、一人の頭を立てて、エジプトへ帰ろう。」

モーセとアロンは、イスラエルの人々の共同体の全会衆の前でひれ伏していた。土地を偵察して来た者のうち、ヌンの子ヨシュアとエフネの子カレブは、衣を引き裂き、イスラエルの人々の共同体全体に訴えた。「我々が偵察して来た土地は、とてもすばらしい土地だった。もし、我々が主の御心に適うなら、主は我々をあの土地に導き入れ、あの乳と蜜の流れる土地を与えてくださるであろう。ただ、主に背いてはならない。あなたたちは、その住民を恐れてはならない。彼らは我々の飢食にすぎない。彼らを守るものは離れ去り、主が我々と共におられる。彼らを恐れてはならない。」しかし、共同体全体は、彼らを石で打ち殺せと言った。主の栄光はそのとき、臨在の幕屋でイスラエルの人々すべてに現れた。

主はモーセに言われた。「この民は、いつまでわたしを侮めるのか。彼らの間で行ったすべてのしるしを無視し、いつまでわたしを信じないのか。わたしは、疫病で彼らを撃ち、彼らを捨て、あなたを彼らよりも強大な国民としよう。」

(民数記 13章25節—14章12節)

〈はじめに〉

ご紹介頂きました日本キリスト教団寝屋川教会牧師の村上公彦です。

教会の傍ら、公益社団法人アジア協会アジア友の会（JAFS）というNGOを主宰しています。

Ⅰ チャペル・アワーに招かれた経緯

この6月に日本キリスト教団洛西教会で、私が主宰しているNGOの地区会がもたれました。

その際、会場を提供していただいた洛西教会のタ礼拝を担当させていただきました。多分そのご縁で、ここに招かれることになったのだと思っています。

キリスト教文化センターから資料として頂いた、小冊子を見拝して、皆さん、校祖、新島先生のことに深い造詣をおもちになって、そのことについて語っておられるのを知って、えらいことを引き受けたと反省をしました。と申しますのは、私は、校祖、新島先生については、お恥ずかしいことですが、それほどの知識をもっていないので、戸惑いました。

Ⅱ 校祖、新島襄についての認識

校祖、新島襄についての私の認識は、これまで、キリスト教信仰に基づく人間の育成を志され、さまざまな困難を乗り越えて、同志社を創設した偉大な人であり、キリスト教伝道の大先輩という程度でした。

日本の開国以来、国家の即戦力になる人材育成が叫ばれている時代に、官制学校教育の向こうを張って、キリスト教信仰に基づく人間教育を目指されたことと、後に、日本の近代化の中で人物の育成に大きな役割を果たしたクラーク博士の働きとが、私の中では常に重なっていました。

お二人とも、同じアーモスト大学にゆかりがあることから、私はアーモスト大学とキリスト教信仰の係りに大きな関心を今ももっています。

Ⅲ 同志社の宣伝協力

同志社大学卒業以来、同志社とはほとんど、これといったかわりはありませんが、二度ほど、同志社の宣伝に使われたことがあります。一度は、かなり前になりますが、「学徒援護会」なる団体が大学特集を組み、同志社特集で、各学部の紹介と卒業生等の学部別人物紹介（各ページ一人）がありました。古くは新島襄、救世軍士官の山室軍平、桜美林大学創設者の清水安三、最近では、土井たか子さん（元衆議院議長）、タレントで参議院議員をされていた末広まきこさん、俳優の二谷英明さん等多彩な卒業生等が紹介される中に、なぜか神学部では私がとりあげられたのです（私の隣のページには、タレントで映画評論家の浜村淳さんの顔写真があったのを覚えています）。もう一つは、週刊誌『AERA』の同志社の宣伝記事に、活躍する同志社人として取材されたこともありました。

それ以外には、同志社とは個人的にこれと言ったかわりはありません。

勿論、キリスト者として、同志社に学んだものとしての同志社の建学の精神や理想に対する誇りは、今も人一倍もっています。

Ⅳ 本日の話

1. 自己紹介

私は、1941年大阪生まれです。日曜学校に通っていた日本キリスト教団扇町教会の辻中昭一牧師に憧れて、1959年同志社大学神学部に入學しました。1965年3月に神学部の大学院修士課程を終えて、竹中正夫教授の勧めで同年5月にインドに留学をいたしました。

行先はインド・バンガロールにある合同神学院（UTCカレッジ）です。

2. インド留学のきっかけの話

インドに留学するきっかけは、大学4年生の時、1962年にアメリカ学生協会主催の東アジアスタディセミナーに選抜されて（日本から2名）参加させてもらったことにあります。3週間にわたり、東アジア各地を巡ったおかげで、アジアに関心をもち、セミナー後、日本会場（東京と京都の2会場）の参加者に呼び掛けて、1963年に「アジア研究会」を結成し、以来約50年間アジアとつながってきました。

その時のセミナーの引率者は、アーモスト大学の教授、ブルース・モーガン博士でした。信仰深い人でした。

3. アジア協会アジア友の会（JAFS）の紹介

2年間のインド留学中、腸チフスに罹りました。それがきっかけで、清潔な飲料水の必要を感じ、後に、アジアに井戸を作る運動を始めました。

現在私が運営している（公社）アジア協会アジア友の会（JAFS）がそれです。

本会の主たる活動は、アジアから貧困を無くす運動として、「水」、「子ども」、「貧困対策」及び「環境」の4分野で支援・援助活動をしています。

現在アジア18カ国69カ所に提携団体（部会、chapter）をもち、アジア友の会（JAFS）国際協議会を結成し、毎年一回アジアの各地で、提携団体を集めて合宿（ネットワークセミナー）を開いています。2019年度は、10月7日～12日までの間、インドネシア・バリ島（ディナプラ大学）で開催しました。29回目で、12カ国102名が参加しました。来年の当番（第30回）はスリランカです。

4. その他の仕事とスイス留学

話は、前後しますが、インドからの帰国後、1968年から、日本キリスト教団寝屋川教会（赴任当時は伝道所）牧師として、また、日本のクリスチャン医療従事者を開発途上国に派遣する団体、日本キリスト教海外医療協力会（JOC S）の関西事務局の設立にかかわり、12年間ほど、寝屋川教会の牧会と兼職でスタッフとして医療協力活動にかかわりました。このことが、現在の活動に役立っています。

そして、1970～1971年、スイスのエキュメニカル研修所に留学させてもらいました。そこで、開発とネットワークについて学びました。当時、ヨーロッパはEEC（ヨーロッパ経済共同体）の時代でした。その時にすでに、研修所ではヨーロッパ統一という課題についてクラスで議論させられ、本当にヨーロッパを一つにするのかと驚きました。

研修所には、ソ連をはじめ、東ヨーロッパ各国からも沢山の学生が来ていました。西側陣営の学生たちとみんな同じ寮に住むのです。驚いたのは、東ドイツの学生と西ドイツの学生が寮の同じ部屋に住んでいることです。二人に問題やトラブルがないのかと聞くと、全然ない、政治的であること（ポリテックス）と人間であること（ヒューマン）は別だと言っていました。さすがヨーロッパの感覚はアジアと一味違うなと思いました。この時、アジアにもこのようなもの（施設）があればいいなと思い、アジアの連帯の必要を強く意識したのです（将来ぜひこのようなセンターを作りたいと思います、修学院の関西セミナーハウスなどは最適だと思っています）。

V 現在行っている国際協力活動と特に強く感じたこと

アジア協会アジア友の会（JAFS）で、何をやっているかと言えば、アジアの貧困地域の生活支援・福祉向上活動です。具体的には、飲み水に困っている極貧の村に井戸を掘ったり、飢餓状態にある子供たちのための栄養改善、給食制度を設けたり、学校に行けない子供の識字学級や学校の建設、障害者の施設作り、職業訓練や地場産業の育成、水源の森作りや植林活動等の支援活動をしています（今年10月で活動40年をむかえました）。

本会の本当のねらいは、こうした活動を通じて、アジアの民衆の自立、中でも精神的自立を図ることであります。地域住民の生活改善を目指した自主活動の奨励です。資金をもらってやるのではなく、知恵を出し合って出来る方法で活動することを進めています。

アジアの民衆の「自立性」、「自主性」を図ることは、アジアのみならず、世界にとっても重要な意味をもちます。地球「運命共同体」の時代において、自立によって貧困を無くし、自助自立を目指すことは不可欠な要件です。

歴史的に長く植民地支配を受けてきた多くのアジアの国々のエリート達は、こぞって民族の自主独立を叫んではいますが、その精神は未だ隷属的であり、外部依存적입니다。国によっては国家予算の50%近くが外国支援で成り立っているところもあります。他者への依頼心が、為政者のみならず、民衆の中にも依然として残っています。

それを好機として、かつての植民地国やその他の先進国は、支援・援助と称して、それらの国々を経済的支配下に置こうとしています。特に、経済的支援は援助者の支配下に置きやすい性質を持っているからです。新たな植民地政策が生まれつつあるような気がします。

VI 貧困の根源

民族の自立や独立を叫び、自立・自助を売り物にする政治的指導者の多くは自分の権威・権力の自立（他者の干渉を許さない）を図ることに腐心し、民衆の生活の自立や福祉をまじめに考えている政治的指導者は極めて少ないと思います。

それがアジアの貧困事態を一層複雑にしています。憲法が作られ、参政権があり、国会が存在し、司法・行政組織が整備され、内閣や政府、警察組織が形の上ではありますが、それがきちんと機能している国が意外と少ないのです。

ましてや、金のかかる国民の福祉政策は殆ど無視されるか、申し訳程度に行われているのが現状です。

そうした中で、貧困の原因は何か。なぜ、未だアジアに貧困に悩む人が多いのか。事情を知る者にとっては問うまでもなく、答えは明白です。しかし、当事者である彼ら自身が、この問題をどのように捉えているか、又、貧困に対する援助の在り方についてどのように考えているのかを議論することは必要で、事あるごとにその機会を設けています。こうした作業を、さまざまな支援活動を通じて根気よく積み重ねてきているのです。彼らこそが、貧困問題の解決すべき当事者であるからです。

安易に物を与える支援・援助は、相手をダメにする（依存心を高める）ことはあっても、問題の解決にはなりません。

今日の支援の多くは、本質において、いわゆる援助ビジネスであります。援助という名のビジネスです。援助する側の利益のために行われている場合が殆どです。支援が悪いことだと言っているではありません。

援助の仕方によっては、真の自立を妨げる危険があると言っているのです。

VII 複雑な問題、支援は何のために

これまでの議論の共通の結論は、貧困からの脱却には、民衆の意識改革につながる教育が不可欠であるということです。

知識に基づく教育は、今日世界中で行われており、アジアにもそうした教育を受けた知識人が結構多くいます。しかし、問題は、教育を受けた人は多いが、その人たちが、それぞれの属する社会の望ましき発展に寄与しているかとなると、かなり疑わしいということになっています。

欧米で最新の教育を受けた発展途上国のエリート達の多くは、自分が得た知識・能力を自分の地位や生活の発展のために用いることはあっても、社会や世の中のために役立てようとしない場合が多くみられるということです。自分が得た知識や人脈・智慧は自分のもの（財産）という考えがあるのです。

せっかく奨学金を出して高等教育の機会を与えても、それは彼の個人的財産（宝物）となり、みんなのために用いられるのではなく、それが社会の発展に十分活かされていないという現実があります。

具体的な例として、ネパールの山村の医療改善のために、地域医療のあり方について日本で医学研修の機会を与えても、帰国すれば日本留学を盾に待遇の良い都会の主たる病院に就職するようなものです。

見方によれば、そのような場合でもその国の医療に役立つことになるのではと言えばそれまでですが、本来の目的からはそれているのです。又そのような選択をする人物は、本当にその国に役立つ人物になるかどうかは、不確かな場合が多いです。時には、より快適な生活を求めて、先進国に移住してしまうケースも多々あります。何のための、誰のための支援であったのかと悔やむことがしばしばあります。

VIII 必要なのは、人材より人物、同志社建学の精神の必要性

健全な社会作りのためには、まじめに自分の民族の将来を考え、人類社会に貢献できることを志すような人間の発見と、その教育・育成が極めて必要であります。

まさに今、アジアは、新島が期待した「良心の全身に充滿したる丈夫」を求めているのです。アジアに必要なのは、人材より人物です。

こうした状況の中で、思うことは、人材の育成を図る教育も必要だが、それ以上に必要なのは、人間精神の育成、人物の育成・発見を図ることです。愛なき教育は悪魔を創ると言われますが、知識は用い方によっては人間を害する場合があります。

常に、自分が得た知識や技術を民衆や社会のために役立てる精神をもった人物の存在が必要です。そのためにはその人間の内面の道徳的強化を図らなければなりません。これは極めて精神的な事柄です。

新島襄が、教育をキリスト教精神においてなすべきだと考えたのは、彼の慧眼でした。しかし、私はこのことを新島自身の人間的知恵から出たものとみるよりは、信仰深いアメリカ人との交わりの中で、イエス・キリスト（神）が新島をそのような志をもつようにとされたのだとみる方が、より信仰的だと思います。

渡米以前は、彼もまた、同時代の若き士族の一員として、若者らしい大志を抱いていたと言われていました。

「国防の任にあるものとして、国家の将来を思い、国家の独立と近代化に貢献したい」と思うとともに、若者らしい人間的な思いもあったようです。渡米に際し、彼は「武士乃思ひ立田の山紅葉にしきさればなと帰るへき」（新島襄全集編集委員会編 『新島襄全集』5 同朋舎出版 1984年 11頁）と詠みました。成功して故郷に錦を飾りたいと思うのは当然のことです。そうした思いを抱いていたからこそ、密航する勇気が生まれたと思います。

しかし、滞米中に多くのクリスチャンに出会い、交流親睦を深める中で、キリスト教のもつ精神に惹かれ、キリスト教信仰をもつに至って、キリスト教信仰に基づく、愛による教育を日本で行うべきであるとの信念を抱くようになりました。帰国に際し、「故郷に飾る錦は匣の中身に纏ふべき時にあらねば」（新島襄全集編集委員会編 『新島襄全集』5 同朋舎出版 1984年）と自分の元目指した立身出世は、その目標の方向転換（悔い改め）をなし、伝道の志を高く掲げて帰国、努力の末、同志社を開設されるに至ったことは周知の如くであります。

我々は、皆その恩恵を被っているのです。

当時を振り返ってみれば、官立学校は、国に役立つ人材の育成のために人を教育し、私立学校は、公義（正義と公平）が通用する民主社会をつくるために必要な人物を創るという方向に発展したと言えるのではないかと思います。

IX 本日の聖書の箇所が意味するもの、「信仰の目」で見る

私が本日選んだ聖書の箇所は、イスラエルの民を引き連れてモーセが約束の地、カナンに入っていく時の出来事です。

この出来事の中に信仰の核心が示されているように思います。

言い換えれば、信仰の神髄が示されていると思います。

それは、約束された地が実際にどのような場所であるかを知るために12部族から優れた者一人ずつを選び、12人に偵察させたという物語です。

偵察した12人全員がその地は素晴らしい土地であることを報告したので民は喜び、苦労して、ここまで来たかがあったと思いました。

しかし、そのうちの10人は、そこにはすでに自分たちよりも強そうな先住民がいて、とても侵入して定住できる状態でないことを報告しました。加えて、現実から得た多くの否定的要件を並べて、その困難さを強調したのです。12人のうちの10人という多数の報告は民にとって信頼の高いものでした。報告により、一瞬のうちに喜びから悲しみへと変えられた民は、大きな失望の中につき落とされました。民は、一晩泣き明かしたとあり、失望の大きさが偲ばれます。

その時、同じ偵察に加わった、ヌンの子ヨシュアとエフネの子カレブの2人は、これに反して、そこが神の約束の地である限り、その地に行くべきであると主張しました。しかし、すでに否定的ムードに入っている民は、神の約束に従い、その地に突き進むべきだと主張する2人の意見を無視するどころか、邪魔もの扱いにして、2人を石で打ち殺そうとしました。そこに神の栄光が現れ、「いつまで私を侮るのか」「私を信じないのか」と神の怒りが表され、事態は収拾したという話です。

イスラエルの民は、神の約束を信じてモーセに従ったにもかかわらず、最後の場面で人間的、常識的判断に従いました。しかし、ヌンの子ヨシュアとエフネの子カレブの二人は神の約束とその実現を信じて、信仰的判断に従いました。この判断の中に真の信仰とは何かを示しています。

普通、信仰者として暮らしていても、土壇場においては、常識的な判断をしてしまう信仰者が多いのです。何のための信仰でしょうか。

しかし、この2人は偵察して見た現実を神の約束の地という神への信頼において、信仰の目で見ることが出来ました。そして、それに従ったのです。

「信仰の目」を持つということは、事実を事実として見るだけでなく、その事実の背後にある神の働き（真実）を信じ、それに基づいて行動することが求められます。信じるとは具体的にそれに基づいて行動することです。

ここでのリーダーシップとは、信仰に基づいて、常に一步先を見つめて行動する者のことです。その裏付けは本人の信仰（信念）です。

「信仰とは、望んでいる事柄を確認し、見えない事実を確認することです」（ヘブライ人への手紙11章1節）とある。

ここで、まだ見ていない事実を確認することとは、一步先の未来を見るということです。

X 現代における偏見、偏った知性の時代

話が信仰的判断というその瞬間から、信仰に関心のない人は、話の事柄に関心を示しません。な一んだ、信仰の事が、宗教かと、自分とは全く次元の違う世界の事として受け取るようです。

自分の生き方や知性には宗教や信仰は全く必要なし、と考えている人が多くいます。特に今日、「人間システム」によって造られた高度消費経済社会は、そのような考えを助長しています。消費信仰の時代です。消費文化こそが人間が求めてきたものであると。

人間の知性は、完璧なものではありません。時代と共に変わっていきます。我々の知性もそのように時代の影響を受けて変わっていきます。自我の確立と共に、15世紀ごろに人文主義の時代を迎え、人間からあらゆる宗教的信仰を取り払おうとする思想が現れ、人間の知性は、神から人間の世界を引き離そうとしてきたのです。無神論が文化的エリート層の主流となるに従い、宗教と神への信仰は、個人と社会の真の進歩を阻む大きな障害となると確信するグループが拡大することによって、人間の理性こそが人間を人間の本来あるべきもの、人間たらしめていると考えるようになり、人々の間に浸透していったのです。結果、信仰をもつということは、一種の自己喪失とみなされるようになりました。その文化的後遺症というべきものが我々の内にあり、信仰や宗教となると、食わず嫌いのように、事柄に対する関心や思考がストップする人が多くいます。

人間は自分の力だけでは、生きることができません。有限なるいのちに基づく人間は、そのいのちが絶えず無限のいのちである神の命によってささえられていることに気が付いていないのです。にもかかわらず好き勝手に言いつつ生きています。かかる人間の存在を、真理に逆らうものとして、かつて使徒パウロは、「腐った知性」を持つものと呼んでいる（テモテへの手紙二3章8節）に等しいと思います。

XI 最後は、信仰告白です

天地創造の神がそうされたように、人づくりは、人の魂を創ることにあると思います。信念や創造主なる神への信仰のない教育は、単なる知識や技術の伝承にすぎず、人づくりとはならないということです。今日なされている教育のほとんどが、その場、その時に役立つ要員（スタッフ）造りであります。その出来栄は偏差値で計られます。

特に、今日の公的教育は、人づくりではなく、時代に役立つワーカー（労働者）づくりに専念している観があります。

それが現実においてさまざまところに弊害として現われていると思います。信念において生きることが難しくなっているようです。

本日のテーマ、「一步先を見つめて歩む力」とは、信仰から与えられるものであります。40年の歩みを振りかえって思うに、私のこれまでの事業活動はすべて、神によって与えられて成り立ってきたと言えます。

思いつく企画のほとんどは、成功していると思います。

それは、いのちに役立つビジョンとして神から与えられたものであり、私にとっては、楽しいやりがいのあるテーマばかりでした。

私は、さまざまな活動を通じて、イエス・キリストの愛のメッセージに基づく、社会づくりの一端を担わされているにすぎないことがわかってきたのです。

すべて、イエス・キリストを通じて命の源なる神への信仰が与えられたお陰だと思っています。

われわれは、常に、単に世間受けのする知的人間を作り出すのではなく、一人ひとりが自分の中にある神の命をしっかりと感じ取り、「社会のための自分」を意識した人間を作り出すことが、役割として与えられています。この仕事は、校祖、新島襄が目指した同志社スピリットにつながるものだと確信しています。

2019年10月30日 同志社スピリット・ウィーク秋学期

今出川水曜チャペル・アワー「奨励」記録